

# 花伝書別紙口伝

一 花を知る事

此の口伝に、花を知ること、  
先づ、仮令、花の咲くを  
見て、万に花と喻え始めし  
理を弁うべし。

抑花と云ふに、万木千草  
に於いて、四季折節に咲く  
ものなれば、其の時を得て

〔口訳〕此の口伝に於て、能楽の花を知ることに就ては、先づ、自然の花の咲くのを見て、それによつて、万事に於て、花を以て喻へ始めた所以を理解するがよい。

一体、花といふものは、万木千草に於て、四季折節に咲くものであるから、その咲くべき時を得て咲き、珍らしく感ずる故に、人々がこれを賞翫するのである。能楽に於ても、見物人が

珍しき故に、玩ぶなり。猿の樂も、人の心に珍しきと知る所、即ち、面白き心なり。花と、面白きと、珍しきと、これ三つは同じ心なり。何れの花か散らで残るべき。散る故に依りて、咲く頃あれば珍しきなり。能も住する所無きを、先づ花と知るべし。住せずして余の風体に移れば珍しきなり。但し、様あり。珍しきと云えばとて、世に無き風体を為出すにてはあるべから

珍らしいと感じる所が即ち面白い感なのである、従つて、花と面白いと珍らしいと、この三つは同じ感であるのだ。如何なる花でも、いつまでも散らないで、残るものは無い。散るからこそ、咲く時節になつて咲くのが珍らしいのだ。能も、一つの風体ばかりを演じないのが花だと先づ心得るが良い。一つの風ばかり演じないで、他の風体に移るやうにすれば、珍しきがあるわけである。

但しここに注意すべき仔細がある。

いくら珍しさが良いといつても、世に行はれてゐないやうな風体を為出すといふのではない。花伝書に示した所の条々について、これを悉く稽古しつく

ず。花伝に出す所の条々を、悉く稽古し終わりて、さて能を演ずる場合に、その習得した様々の曲を、適材適所に取り出して演すべきである。

て、猿樂を為ん時に、其の物數を、用々に従いて取り出すべし。

花と申すも、万の草木に於いて、何れか四季折節の、

時の花の外に、珍しき花の有るべき。その如くに、習い覚えつる品々を究めねば、時折節の當世を心得て、時の人好みの品に因りて、其の風体を取り出す、是時の花の咲くを見んが如し。

花といつても、万木千草に於て、四季折節に咲く花以外に、何の珍らしい花があり得ようぞ。それと同様に、能

に於ても、習ひ覚えた能の各体を究めたならば、その時々の人々の好尚によつて、それに向くやうな風体の能を選んで演ずる、これ丁度、四季時々の花の咲くのを見ると同じである。花といふのも去年咲いた花と変りはない。能も、曾て見た風体の能ではあるが、各様の曲に通じた演者は、その様々な曲を一通り演じる間に、相当の年月が経つものだ。従つて、同一の風体の能も、久しぶりで見る時には、又珍らしく感じるものである。

花と申すも、去年咲きし種なり、能も元見し風体なれども、物数を究めぬれば、其の数を尽くす程久し。ひさしくて見れば又珍しきなり。

其の上、人の好みも色々に

して、音曲、振る舞い、物の真似、所々に変わりて、と

りぐなれば、何れの風体をも、残しては叶ふまじきなり。然れば、物数を究め尽くしたらん為手は、初め尽くしたらん為手は、初め

春の梅より、秋の菊の花の

以上述べた上に、人の嗜好といふも

のは千差万別で、音曲・ふるまひ・物真似等の好みに於ても、所々で變つて様々なものがあるから、何れの風体をも悉く演じ得るやうでなくては不十分である。それで、物数を究め尽した役者は、丁度初春の梅花から秋の菊花の咲き果てるまでの、一年中の花の種を持つてゐると同様で、如何やうな花でも、人の好みに応じ、時と場合に応じて、それぞれ適當なものを取り出すことが出来る。物数を十分に究めて居ないと、時によつては人々の好みのものを出し得ないで、花を失ふことがある。

咲き果つる迄、一年中の花の種を持ちたらんが如し。何れの花なりとも、人の望み、時に因りて取り出すべし。物数を究めずば、時に依りて花を失う事あるべし。仮令ば、春の花の頃過ぎて、夏草の花を賞玩せんずる時分に、春の花の風体ばかりを得たらん為手が、ばかりを得たるゝは無くて、過ぎし夏草の花は又持て出でたらんは、時の花に合ふべしや。是にて知るべし。只、花は、

例へば、春の花の時節が過ぎて、人々が夏草の花を賞翫しようとする時分に、春の花の風体ばかりが得意な役者をまた持ち出したとしたら、それは到底時の花に合ふ筈はない。以上のたとへで知るが良い、ただ花といふのは、見物人の心に珍らしく感じるのが花であるのだ。花伝書の花の段に、「物数を究め、工夫を尽して、然る後に花の失せぬ所を知るべし」といつてあるのは、この口伝であるのだ。それで、花といつて何も特別なものがあるのでは、花は心、種はわざ」と書いてあるのも、この事であるのだ。

ぎて、夏草の花を賞玩せん  
する時分に、春の花の風体  
ばかりを得たらん為手が、  
夏草の花は無くて、過ぎし  
ばかりの花を又持ちて出でたら  
春の花に合ふべしや。

見る人の心に、珍しきが花なり。然れば、花伝の花の段に、「物数を究めて、工夫を尽くして後、花の失せぬ所をば知るべし」とあるは、此の口伝也。されば、花とて別には、無きものなが花なり。「花は心、種はり。物数を尽くして、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり。」と書けるも是なり。

物真似の鬼の段に、「鬼ばかりを善く為ん者は、鬼の面を白き所をも知るまじき」と

物学条々の鬼の段に於て、「鬼ばかりをよくせん者は、鬼の面白き所をも知るまじき」とも述べたのは、役者が様々の曲に亘つて、所謂物数を尽して後、鬼を珍らしく演出したならば、

も申したる也。<sup>まう</sup>物数を尽くして、又珍しく為出したらんは、珍しき所、花なるべき程に、面白かるべし。余の風体は無くて、鬼斗を為る、上手と思はば、善く為たりとは見ゆるとも、珍しき心、有るまじければ、見所に花は有るべからず。「巖に花の咲かんが如し」と、申したるも、鬼をば、強く、恐ろしく、肝を消す様に為るならでは、凡その風体無し。是巖なり。花と云ふは、

その珍らしい所が花となるであらうか  
ら、面白いであらう。しかし、他の風  
体をやらず、鬼ばかりを演ずる上手  
だと見物が心得てゐたならば、たとひ  
鬼は上手に演じたとしても、そこに珍  
らしさといふ感じは起るまいと思はれ  
るから、その演出に花といふものはあ  
らう筈がない。「巖に花の咲かんが如  
し」と述べたのも、鬼を演じては、強  
く恐ろしく、見物が肝を消すといふ風  
に演じなくては、凡そ鬼の風体なるも  
のは無い。これ即ち巖にも比すべきも  
のである。所が、花といふのは、あら  
ゆる風体を演じて、見物が優雅至極の  
上手だと思ひ馴れて居る所へ、思の外  
に、鬼のやうなものを演ずると、非常  
に珍らしく見物が感じる。これが花な  
のである。だから、鬼ばかり演ずる役  
者は、言はば巖ばかりで、花はないわ  
けである。

き心、有るまじければ、見  
所に花は有るべからず。 「巖  
に花の咲かんが如し」と、  
申したるも、鬼をば、強く、  
恐ろしく、肝を消す様に為  
るならでは、凡その風体無  
し。 是巖なり。 花と云ふは、

ゆる風体を演じて、見物が優雅至極の上手だと思ひ馴れて居る所へ、思の外に、鬼のやうなものを演ずると、非常に珍らしく見物が感じる。これが花なのである。だから、鬼ばかり演ずる役者は、言はば巖ばかりで、花はないわけである。

余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と、人の、思ひ馴れたる所に、思いの外に鬼をすれば、珍しく見ゆる所、是花なり。然れば、

鬼斗を為んずる為手は、巖斗にて、花は有るべからず。

〔評〕

此の段は、別紙口伝の中の序段ともいふべき条で、先づ花といふものに関して、徹底的な解釈を加へた所が眼目である。問答条々に於ては、幽かな暗示を与へたにすぎないが、それが此の段に於ては、實にあざやかに胸がすくばかりにキビキビと解明せられて居る。これだけに鮮明に解き得るものならば、問答条々に於ても、も少し説き明しても差支ないであらうにと、感じられる読者もあられるであらう。が、そこが秘伝の秘伝たる所で、先づ悩み苦しみ工夫省察の限りを尽さしめて後に、

この秘伝を伝へる所に、伝へたものが、即時に被伝受者の魂の眼を開かせる力と化するのであつて、そこに言ふに言はれぬ神秘的な悟りが生れるのである。禪の公案工夫にも似た処がある。伝へるべき時期の至るまでは秘するといふ事が、真に秘伝を生かす所以であることを考へ度い。

「花と、面白きと、珍らしきと、これ三つは同じ心なり」といふ条。「能も住する所なきを先づ花と知るべし」といふ条。これ二つが殊に眼目の所である。

芸能で人が感心させられるのは、その上手さ・うまさであり、上手さ・うまさが見物の心を打つて、ここに面白さが生じる。花の要件として面白さといふものを出したのは如何にもと首肯し得る。下手では面白さが無い。然るに世阿弥は面白さの中に、珍らしさといふ要素を加へて居る、上手の芸でも、何回も何回も連續して同じものを見せられては、見物に倦怠の心が生じるといふのも、動かすべからざる真理である。そこで見物の心理を見通して、彼等が要求しきうなものを、先手を打つて提供し、演技に変化あらしめて、珍らしさの感をかち得るとなれば、その上手の芸は常に百パーセントの芸術的効果をあげ得る。花は、いはゞ、

百パーセントに發揮せられた芸術的効果であるとも言ひ得る。「猿樂も人の心に珍らしきと知る所、即ち面白きなり」と世阿弥はのべてゐて、上手さ・うまさといふ事には言及してゐないが、「物數をつくし工夫を得て、珍らしき感を心得るが花なり」といふ中に、これが含まれてゐると私は考へる。いくら珍らしくても、下手ではてんで問題にならないからである。

「能も住する所なきを先づ花と心得べし」といふのも、珍らしきの感を常に保ち得んが為である。元来「住する」といふ語は、金剛經に、「応無所住而生其心」といふ有名な文句もあつて、仏教上の用語である。一所に停滞して押し移る事を知らぬのを「住する」といふ。芭蕉の語でいへば、流行を知らぬものであり、近代的な表現を借りれば、発展性を失つた凝固状態をいふ。世阿弥はそれを軽く用ひて、常に変化ある珍らしさを持つことを、住する所なしとのべたのである。

次に珍らしきといふ条件に対して、一つの警戒の辞をあたへてゐる。それは、「珍らしきと言へばとて、世になき風体を為出すにてはあるべからず」である。新奇なものをせよといふのでは無くて、「花伝に出す

所の条々を悉く稽古し終りて、さて猿樂をせん時に、その物数を、用々に従ひて取出」して演ずる事であるといふ戒である。「万づの草木に於て、何れか四季折節の時の花の外に、珍しき花のあるべき」などといふ比喩は、実に生きて使はれてゐるのを感じる。

第三に、花の基礎的な要件として、物数を究めつくすといふ条が示されてゐる点を注意し度い。即ち如何なる能をも完全に演じ得るまでの鍛錬修行をつむことが大切だといふのである。時と所と人とによつて、ここでは如何なる能を演すべきかを見分けるのが「花は心」の心であるなつては遅いのである。

最後に、鬼の面白さを説き、「嚴に花の咲かんが如し」といふ条を説明した所など、如何にも手に入つたもので、ただ成程と感心させられるばかりである。